

【聞き取り票】

【証言者についての基本事項(太線の枠内にご記入ください)】

記入年月日	2014年 7月 31日	整理 No.	—
ふりがな ご氏名	仲伏 幸子 (なかぶし ゆきこ)	性別	1. 男 <input type="radio"/> 2. 女 <input checked="" type="radio"/>
生年月日	明・大 <input checked="" type="radio"/> 昭 <input type="radio"/> 14年 月 日 (被爆時年齢：5歳)		
現住所	〒 電話 FAX		
被爆地	1. 広島 <input checked="" type="radio"/> 2. 長崎 [町名：西観音町 距離 1.7 km]		
手帳区分	1. 直爆 <input checked="" type="radio"/> 2. 入市 3. 救護 4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種] 6. 被爆者の子・孫 7. その他		
氏名の公表の可否	1. 可 <input checked="" type="radio"/> 2. 不可 <input type="radio"/>		

1. 被爆したときのことをお聞かせください。

今から69年前、人類史上初めて原爆が広島に落とされた時、私は小学校に入学する前の幼稚園児で、5歳9か月でした。家族は祖父母と、父母、兄と私の6人家族でしたが、当時、父は招集されて海軍で戦っておりました。国民学校3年生だった兄も、4月から学童疎開に行き、比婆郡という中国山地の麓のお寺で集団生活をしていましたので、広島市の自宅には、祖父母と母と私の4人だけが生活していました。

「学童疎開」と言えば必ず思い出す光景があります。その年の4月に、学童疎開に出発する兄を、母と二人で、確か已斐駅だったと記憶していますが…見送りに行きました。3年生以上が疎開するのですが、3年生になったばかりの女の子が数人行きたくないと言って、お母さんに取りすがって泣いていたのです。臨時列車ですから、みんな乗り込むまで待ってくれるのですが、なかなか出発できなくて、ポーッと合図の汽笛が鳴っていました。泣いている子を無理やり押し込めるようにして出発したのですが、その時の親子の別れの光景が忘れられなくて、今でもそれを思い出すと目頭が潤んできます。それから4か月後に原爆が落とされたのですから、あの時が「親子の別れ」になった人達が多いのです。自分は疎開していて助かっても、親が亡くなって孤児になった人達が沢山いたわけです。学童疎開というと、どうしても、あの場面が思い浮かんでくるのです。

太平洋戦争が始まったのは、私が2歳の時ですが、1945年の3月には東京が大空襲に襲われ、続いて、名古屋、大阪、横浜、神戸…と、次々に大都市が襲われましたが、ほとんどの都道府県一私が調べた限りでは、1都1道2府と、43県のうち42県で、島根県を除いた他の都道府県一で、153の都市が爆撃を受けて大きな犠牲を出しました。資料によりますと、焼失した家屋は218万戸以上に上ったそうです。

当時の日本は、ほとんどが木造家屋で一広島の場合、98%が木造家屋でしたから、とても燃え易かったようです。そこで延焼を食い止めるために建物疎開が始められたわけです。

当時、広島にも、敵機が飛んで来まして、私たちは昼夜を問わず、何回か防空壕に逃れた記憶はあるのですけれど何故か爆撃はされませんでした。東京や大阪などから疎開をしてきた人もあった程です。

広島がそれまで、何故他の都市のように爆撃の被害を受けなかったのか、その理由をご存知でしょうか？資料などによりますと、アメリカの政策・軍の方針で、初めて使用する原子爆弾の威力、破壊力を知るために、候補地に挙げた都市一、広島・小倉・長崎・新潟などは、通常の爆撃を取ってしなかったのだそうです。そんな米軍の方針など知る由もありませんでしたから、当時、広島でも空襲に備えて「建物疎開」が始まっていた。その作業には一般市民のほかに、市外からも義勇隊として多くの人が参加していました。また、中学生や女学生徒たちまでも、夏休みを返上して、朝早くから駆り出され、夏の暑い盛りに市の中心部、その他に集合していたのです。

8月6日も朝早くから、市の中心部やその周辺で建物疎開がおこなわれ、母も近所の人達と出かけていました。家の近くにあった広島県立第二中学校(二中)の生徒たちも、1年生と2年生が1日ずつ交互に建物疎開に出かけており、その日は1年生 321名と4名の引率の先生が作業に出かけていました。後で分かったことですが、米軍は事前の偵察で、多くの人が集まることを予知していたのだそうです。

私の家は、爆心地から1.7kmのところでしたが、家には祖父母がいました。私が通っていた幼稚園は、道路を挟んで家のすぐ真向いにありましたので、園の鍵を預かっていました。先生が朝8時頃、鍵を取りに来られる時に、私はいつも先生と一緒に登園してましたので、毎日、一番早かったのです。その日も、まだ誰も来ていない広い教室、この部屋をもう一つ加えたぐらいの広さの部屋で、私は黒板に向かって絵を描きながら、友達が来るのを待っていました。

間もなく8時15分を迎えたわけですが…、その瞬間、鋭い光・稲妻よりも何倍も明るいと思われるような光がピカーッと光って、窓ガラス一面がパッと明るくなったかと思うと、次に、ドカーンという地響きのような鈍い音を聴きました。…と、そこまでは覚えているのですけれども、その後、記憶が途切れているのです。少しの間、意識を失っていたのか、極度の恐怖心のせいなのか分からないのですけれども、とにかく、記憶が途切れているので、そのドカーンっという音を聴いた後、自分がどうなったのか、どうしたのか、全く記憶がないのです。

原子爆弾の被害には通常の兵器と違って、熱線、爆風、放射線—の3つの特徴があったわけですが、資料によりますと、原爆が炸裂したのは広島の場合、580mの上空だそうですから、スカイツリーの高さより約50m位下がった辺りを想定してください。その高さで炸裂して、半径が200m位の大きな火球・火の玉ができたそうです。その表面温度は、太陽の表面の温度6,000度よりも高い8,000度ぐらいの温度だそうです。そのため、爆心地の地上には、その瞬間3,000度ぐらいの熱線が到達したそうです。鉄の溶解温度が1,550度位だそうですから、瓦が溶けて、人が炭のように黒く焼け焦げたりしたわけです。

また、爆風の風圧・衝撃波によって、爆心地の最大の風速は、その瞬間、秒速440mにも達したそうですが、そのため、爆心地から半径2km以内の木造家屋は、その風圧で倒されて、その後熱線で燃え広がったわけです。私のいた所は1.7kmでしたから、幼稚園の建物は壊れてその後燃えてしまいました。

窓ガラスが壊れた地域は、爆心地から半径16km位まで及んだそうですが、私のいた1.7kmの距離では、ガラスというガラスは木端微塵となって飛び散りました。幸いにも私は、ガラス窓から最も遠いところで、

黒板に向かっていたので、粉々になったガラスの破片3～4cm位のものが背中の一つ刺さっただけで済みましたが、お炊事場にいらっしゃった先生は、ガラス窓に面して立っていらっしゃったのでしょうか、顔中に無数のガラスの破片が突き刺さって、血まみれでまるで赤鬼のような形相だったということを、後日、祖母が近所の人から聞いております。私は先生に会っていないのです(その後、私は田舎に移転しましたから、先生の消息は途絶えたままなのです)。

ガラスによる被害はかなり多かったようで、被爆から10数年経った頃、私の周辺にも体の中や顔にガラスの破片が入ったまま残っている人が何人かいました。先程申しましたように、幼稚園の建物は、倒壊して跡形もなく焼けてしまいましたから、あの時、もしも私がそのまま教室の中において、助けがくるのを待っていたとしましたら、建物の下敷きになって、建物と一緒に焼け死んだかもしれないのです。事実、あの日亡くなった人のうち、そうして壊れた建物の下敷きとなって圧死した人や、逃げ出すことができないで建物と一緒に焼け死んだ人は、当日の死亡者の半数近い48パーセントの人に上るそうです。

広島地図と一緒に見てください。広島には7つの川があり、三角州にできた街です。ここが爆心地で、私の家はここから1.7キロ、西観音町のこの辺りでした。母は推定 900m～1kmの位置、加古町・万代橋の近くと聞いていますが、この辺りで作業をしていたそうです。

記憶が途切れているために、私は、幼稚園からいつ、どのようにして逃げたかというのが分からないままですが、閃光の後爆音を聞いて、とっさに飛び出たのかも知れません。とにかく早い段階で幼稚園から家に帰ったわけです。帰ってみますと、平屋の家は倒れて屋根や天井が押しつぶされており、その下敷きになった祖母を、祖父が、必死で助け出しているところでした。どれ位の時間がかかったのかは定かではないのですけれども、もし、祖父がいなかったら祖母は助からなかったと思います。やっとのことで助け出された祖母と私は、ひとまず、南観音町の親戚に避難することにしました。祖父は脚に怪我をしていましたが、残って近所の人達と救助活動に当たっていました。

祖母と二人で親戚の家に逃げる途中、灰色の墨汁を薄めたような、にわか雨が降ってきました。私たちはもちろん、それが放射能を含んでいる「黒い雨」だとは全く知りませんでした。たまたまもう一軒の親戚が目の前にあったので、洋館のその家のポーチで雨宿りをしました。それが“黒い雨”とは知りませんでした。間もなく自分の家が焼けるのが分っていましたから、着替えることもできないので濡れたくなかったのでしょうか、何も知らずに雨を避けた私達はここでも幸運でした。二人がその後生き残れることにつながったかも知れないのです。

ご存じの方も多いかと思いますが、「原爆の子」の像や映画「千羽鶴」のモデルになった「佐々木禎子さん」も、2歳の時にお母さんに抱かれて逃げる途中でこの“黒い雨”に遭いました。走るのが速い元気な女の子でしたけれども、10年経って、6年生の時に白血病になり、中学生になっても1日も通学できないうで亡くなったのです。10年後に発病したのは、この“黒い雨・放射能雨”を浴びたことが原因ではないかとも言われています。

私が避難した南観音町の親戚の家では、火の手もそこまでは追ってきませんでしたので、難を逃れた人達が集まって、しばしの休息をとっていました。祖母の話では、原子爆弾が落とされたとは誰にも分りませんでしたから「ガスタンクが爆発したのだろうか？」などと話していたそうです。

その日、私は木綿のワンピースを着ていたのですが、背中に血が滲んでいるのを見た人に言われて、その時初めてガラスが刺さっていたことに気が付いたのです。今では信じられないような話ですが、その

時までガラスが刺さったことを知らなかったのです。それ程緊張していたということでしょうか？ 祖母によりますと、その日私は泣かずに敏捷に行動できたようですが、「今は泣いている場合ではない」と、5・6歳の子どもにも分るほど、目の前の出来事の衝撃が大きかったのだと思います。

先程申しましたように、母は爆心地に近い町で作業していましたから、全身に熱線を浴びて大火傷をしました。それにもかかわらず、一人で家まで帰ってきたのです。一緒に行った多くの人達が熱さや痛みには堪えきれず、川に飛び込んで行方が知れない人が多いのですが、母は家まで帰ってきたのです。その途中には、壊れた建物とか瓦礫が道を塞いだりして、歩きにくい状態だったことが、後に多くの証言で分かったのですが、そのような健康な人でさえ歩きにくい道を、全身火傷した体で、カラカラに乾いた喉を潤すこともできないまま、家まで辿り着いたのです。そして、祖父に私が無事であることを聞くと、ぐったりと倒れこんで動けなくなり、意識が朦朧としていったのだそうです。私の無事を知るまでは、力の限り頑張ったのだと思います。母をよく知る人達に「お母さんはあなたのことが心配でならなかったから、頑張って帰って来られたのよ」と、よく言われました。子どもの身を案じる母親の愛情の深さというものを、私は幼くして知らされたのです。

その後、意識の薄れた状態の母を、何の手当てもできないままに、祖父の曳く大八車(荷物を運搬する木製の二輪車)に乗せて、山の手の母の実家のある町・古田町をめざして逃げました。その時刻がはっきりしないのですが、その途中で出くわした光景が幼い私の目に焼き付いていて、今でも忘れることができないのです。私がそこで目にしたのは、爆心地に近い町で被爆して、郊外へ向かって逃げて行く人達の行列でした。それらの人は爆風や熱線を浴びたのでしょうか、頭から灰をかぶったように汚れていて、髪の毛は逆立ち、火傷した腕や体の皮膚がぼろ布のように垂れ下がっていました。私は最初、洋服が破れて垂れさがっていたのだと思っていたのですが、祖母の話では、洋服ではなくて焼かれた皮膚が垂れ下がっていたのだということでした。また、洋服も風圧で飛ばされたのか、焼けてしまったのか、ほとんど裸に近い格好の人や、裸足の人もありました。爆心地に近い所では、履いていた靴まで飛ばされたそうですから…。そんな風に埃にまみれた、男女の区別も付かない人たちが、力ない足取りで、声を上げるだけの気力もなかったのでしょうか。ただ黙々と、ゆっくり歩いていたのです。それはまるで、地獄絵に描かれた「幽霊の行列」のような光景でした。

広島は典型的なデルタの街ですから、7つの川がありました。そのうちの西の2つの橋を渡って逃げたわけですが、一つ目の西大橋まで来たら、そこでもまた悲惨な様子が目に入ったのです。そこまでは何とか逃げてきたものの、喉の渇きに耐えられなくなったのでしょうか、多くの人達が水を求めて川に群がっていて、さながら海水浴場のようにごったがえしていました。私たちは橋の上から見たわけですが、川の中には流されている人達もありました。それらは既に死体となって流されていたのだと思われます。また、橋の上では、動けなくなった人達が、ある人は座り込んだまま、ある人は起き上がる力もなく寝そべったままで、手を伸ばして「水…、水…」と、うめくようにせがんでいました。私達はもちろん何一つ持っていませんでしたから、水も水を入れる容器もありませんから、それらの人達を避けるようにしながら橋を渡ったのです。そうした瀕死の状態の人たちの最後の願いに応えることもできず、避けて通ったわけですから、子どもながらも心の何処かに残っていたのでしょうか、後にその時の光景を何度か夢に見たことがあります。

そのようにして私達は、爆心地から約4kmの位置にある高須まで逃げたわけですが、母の実家には、すでに親戚縁者が大勢逃げてきて家中ごった返しておりました。そのため母は500m位離れた臨時の

収容所へ運ばれました。子供の目に多く感じたのかもしれませんが、そこには100人位いたでしょうか？重症者ばかりが集められていました。手の施しようもないからでしょうか、応急的な処置さえされなかったようです。当時は国中であらゆる物資が不足していた上に、広島市内の10数万人もの人が一度に火傷や傷を負ったわけですから、医薬品が不足していたのは当然だと思われます。その貴重な薬は生き残れる見込みのある人に回され、今にも死にそうな、助かる見込みのない人には回す余裕がなかったというのが実情だったのではないのでしょうか。私の母もただ寝かされていただけのようでした。医者らしい人が、時折巡回していましたが、特に何の手当てもされなかったように記憶しています。

私は母の傍にずっと付き添っていましたが、8月上旬の30度を超す暑さの中、辺りには、異臭が立ち込めてました。魚1匹焼け焦げててもかなり臭いますね。全身火傷で、死を待つばかりとなった人達の集団から発生するあの臭いは、肉親でなければ堪えられなかったのではないのでしょうか。ただし、麻痺してしまうのでしょうか、そこにずっといると耐えられたのですが、後でそこを離れてから、その臭いを思い出すと食欲がなくなる程でした。あの臭いを忘れるまでに、数年かかったほどでした。

あちらこちらで「水！水！」と、水を求める声が聞こえておりましたが、水を飲ませるとすぐに死んでしまうから、飲ませないように言われていたのです。母も傍にいた私に水を求めたことがあったかもしれません。けれども、なぜか私はその時のことを覚えていないのです。どうせ助からない命ならば、いつそのこと思う存分飲ませてあげればよかったと悔やまれて、いつも心の中で母に詫びていました。さぞ辛かっただろうと思います。

水を欲しがると、うめき声も次第に減って行って、一人、二人と息絶えていきました。家族のすすり泣きが聞こえるからそれが分かるわけです。私の母も、2日後の8月8日、傍にいた私が気が付かない間に静かに息を引き取っていました。わずか31年の生涯でした。夫は遠い戦地に在ってその生死さえ分らず、9歳の長男は疎開先に預けたまま会うことも叶わず、5歳9か月の私に看取られながら、何も言い残すこともできないで逝ってしまうことは、さぞ心残りだったと思います。

母は郊外で亡くなりましたから、火葬されて遺骨も手にすることができましたが、街中で亡くなった人たちは、あまりにも数が多かったために、一人ひとり火葬することはできませんから、校庭や焼け跡に山のように積まれて、油をかけて十把一絡げに燃やされました。真夏ですから、遺体をそのままにしておくすぐに伝染病が蔓延しますから、すぐに片づけざるを得なかったのだと思います。多くの遺体は家族を待たずにさっさと葬ってしまわれたのです。そのために、家族が探しに来た時はすでに焼かれてしまって、死に目に会うこともできなかった人が多かったわけです。

誰の骨だかわからないままに一緒に焼かれた骨の一部を持って帰った人や、空っぽのままのお墓もあるそうです。資料によりますと、家族が死に目に会えた人は、約4%しかなかったそうです。遺体を確認できた人が23%で、遺骨で確認できた人が27.7%という数字が出ています。当時の死者の半数近くが行方不明のままなのです。河口から瀬戸内海に流れて海の藻屑と消えた人も多かったのです。

初めにお話しました二中の学生達は怎么样了と思われますか？321名と4人の引率の先生、全員が死亡しました。彼等はあの時刻に、爆心地からおよそ500mの位置の太田川の土手に整列していたのです。原爆を搭載したエノラゲイが飛んできたのをそれとは知らず、みんな整列しながら見ていたそうです。321名と4人の引率の先生、全員が死亡しました。そこで即死した子もありますし、先生に「川に飛び込め」と言われてすぐ飛び込んだ子もいますし、母のように、家まで帰った子も何人かいました。それらの子

の証言が残されていて、その時の様子が分ったのです。それらの証言が父母から集められて『いしぶみ』という本が作られました。以前、テレビでも放映されたことがあります。

その作業には、1年生と2年生が交互に行っていたそうで、あの日は1年生の日だったのです。大阪や東京の空襲がひどいので、親が子どもだけを爆撃のない広島の中学校に入れて、寄宿舎(寮)に入っていた生徒もいたのです。安全だと思って広島に行かせたのに、親が助かって子どもが死んでしまうという悲劇が起きたのです。以上、私の家の近くにあった中学生について話しましたが、当日犠牲になったのは、広島市内のほとんどの学校・41校の生徒たちで、生徒数 8,207 人のうち、約 6,000 人・73%の生徒が死亡したことになります。当時中学生だった知人の中には、当日の朝お腹が痛くなり、お母さんが休むように言ったから自分の命が助かったという人もいますし、逆に調子が悪いのに、親に休まないと言われて出かけ、家が爆心地に近かったため家族が死んで自分が助かったという例もあり、それぞれが紙一重で幸・不幸が分かれたものばかりです。

私は、母が亡くなってから、お骨と一緒に自宅のあった西観音町に帰りました。帰ってみますと、焼け野原になった所に幼稚園の石の門柱・御影石の白い石でしたが、それがキラキラと太陽に輝いているのが印象的でした。廻りの家がすべて焼かれてしまって、遠くまで見渡せたのを覚えています。わが家の焼け跡に立って、私が目にしたものと言いますと、当時の底が丸い「五右衛門風呂」の風呂釜と、水道のカラン、つまり金属製のものだけでした。祖母の話によりますと、私は自分の部屋があった位置にたたずんで、沢山あった絵本や大切にしていたお人形が跡形もなく焼けてしまったことを悲しんでいたそうです。

祖父母と私は、夜は幼稚園の防空壕を利用しながら、焼け跡で数日間を過ごしたわけですが、今のよな豊かな時代と違って、自分たちが食べていくのが精いっぱい貧しい戦時中でしたから、先の東日本大震災の時とは雲泥の差で、炊き出しは「おにぎり」だけでした。おにぎり一個をもらうために行列に並んだのを覚えています。またある時は、祖父がどこからか手に入れてきた、みかんの缶詰—当時は貴重品でしたが、その生温いミカンを、3人で分け合って食べたこともありました。

そのようにして、焼け跡での罹災生活を余儀なくされていたところへ、祖父の出身地である田舎から、迎えがやってきました。被爆後4～5日ぐらい経った時だと思います。「新型爆弾が落ちて広島の街は全滅したそうだ」という噂やニュースを聞いた大伯父が、親戚筋の若い男の人と荷馬車を寄越してくれたのです。もちろん当時は一般の家庭には自動車はありませんでしたから、牛や馬が牽く車がそういった運搬の役を果たしてくれたわけです。当時、その惨状があまりに酷かったからでしょうか“広島には75年間草木も生えぬ”というデマが流れておりました。その原子砂漠となった広島の街を、私たちはその日の夕方逃げるようにして田舎に向かいました。もちろん運ぶべき家財道具は何一つありません。母の遺骨と一緒に、夜道をコトコト揺られてたどり着いた先の山村が、私にとって第二の故郷となりました。それから後に私の一家が広島の街に戻って生活することはありませんでした。それが、私の人生の大きな岐路にもなったのです。

広島に続いて3日後の9日には、ご存じのように長崎にも二つ目の原爆が落とされて、またまた7万人以上の犠牲者を出しました。そして8月15日、やっと終戦になりました。

【この項に関わる参加者との質疑応答】

- 被爆された場所を聴いて、(爆心地に非常に近いので)驚きました。

(仲伏さん): 1.7kmでしたから、幼稚園の建物も倒れて燃えてしまいました。すぐに逃げなかったら、建物の下敷きになって、焼け死んでいたかもしれません。いつものようにして飛び出したのか…靴を履いて出たかどうかさえ分かりません。道路を挟んですぐ向かいが自宅でしたから、すぐに飛び出したのかもしれません。記憶が戻った時には倒れた家の前にいました。あの距離で、ガラスの破片がひとかけらだけ刺さった位で助かったのですから、幸運だったとしか言えません。

●雨は黒かったですか？

(仲伏さん): はい、黒かったです。私が覚えているのは「まっ黒」ではなかったと思いますが…、ダークグレーというのでしょうか、墨汁を薄めたような色だったように記憶しています。“黒い、黒い”って言われていますが、私が遭ったのはそんなに真っ黒ではなかったと思います。場所によって、ごみや浮遊物の含み方が違ったので、それによって雨の色の濃さ加減も違ったのかもしれません。場所によっては「真っ黒」だった所もあったのかもしれません。

●被爆したお母さんに付き添われていて、怖くはありませんでしたか？

(仲伏さん): 記憶がないので想像ですが、多分怖くはなかったように思います。だからあのような重症者ばかりの中に2日間居られたのだと思います。ただ不思議なことは、母を思い出す時、火傷した姿が全く浮かばないのです。記憶にあるのは、朝出かけた時のきれいなままの母の姿なのです。

2. その後の人生についてお聞かせください。

父は当時所属していた軍艦が、米軍の本土上陸に備えて四国の土佐湾の沖に、配備されていたため、ことのほか早く復員することができたようです。父自身は、生きて帰ることはできましたけれど、守るために戦っていた国土には、原爆が落とされ焼野原となって、家も跡形なく焼けてしまい、妻は被爆死したことを知らされました。父は一言も話すことなく逝ってしまいましたけれども、その時の衝撃は、決して小さいものではなかったと思います。

また、疎開先で何も知らないまま迎えが来るのを待っていた兄は、父が迎えに行き初めて、母の死や家がなくなったことを知りました。疎開先には兄の後にもまだ沢山の生徒が残っていたそうですが、最後まで誰にも迎えに来てもらえない子もあったわけです。両親とも亡くなった場合です。親戚の人が迎えに来てくれた場合はまだよかったのですが、孤児院に入った子もいたそうです。

数年前に兄から聞いた話ですけれども、疎開先にしばらくして母が面会に訪ねて行ったそうです。そしてお寺の物陰に兄を連れて行って、持参したおやつを食べさせてくれたそうです。その頃手に入れ難かったものを何とかして工面して持って行ったのでしょうか。今でしたら級友たちの分も持って行くでしょうけれど、当時は入手が困難な時代でしたから、面会に行った人は皆そのようなやり方が暗黙の了解になっていたようです。そして、夜は一晩だけ特別に別室で親と床を並べて寝ることが許されたそうです。それが、兄と母との最期の別れになったわけです。

また、疎開先での食糧事情が相当悪かったのでしょうか、帰ってきた兄は4か月の間に痩せこけて顔色も悪く、栄養失調で坊主頭の髪も白髪になったり抜けたりしていました。その様子を見て胸を痛めた祖母は、何とかして栄養をつけなければと、疎開させていた着物を農家に持って行き、物々交換して栄養のあるものを食べさせるなどして、兄の体力回復のため母の代りに奔走していました。

8月15日、戦争は終わりましたが、私たちにとってはそれからが新しい人生との闘いの始まりになりました。都会生活から一転して田舎の生活に変わったことも大きなリスクでしたが、とにかく、何もかも失ってゼロからの出発でしたから、経済的にも苦しい日々が続いて、それまで順境にあった家族全員の人生を大きく覆されてしまいました。5歳の私にとっては、何よりも母を失ったことがその後の人生を根底から変えてしまう程のダメージとなりました。周囲の人の強い勧めもあって、その後、父が再婚しましたから、私達は新しい母を迎えました。戦争が人の命を奪うばかりではなく、生き残った人々の人生も、大きく変えてしまうものであることを、皆がそれぞれに思い知らされたのでした。

それから1、2年して、予想もしなかった悲しい出来事が起こりました。と言いますのは、焼け跡にいた私達を迎えに来てくれた親戚筋の若い男の人と、荷馬車を牽いてくれた馬が相次いで亡くなったのです。彼らは、原爆が投下されて4～5日経った街を、東の端から入って中心地を通り、市内をあらゆる探しながら私達の居た西側の町まで辿り着いたわけですから、残留放射能を浴びたことは明らかです。誰もが原爆との因果関係を疑ったわけです。馬諸共ですから……。まるで私たちの身代わりになったかのようで、子ども心にも申し訳ないような、やるせない気持ちになったことを覚えております。そして、自分たちにもいつ襲いかかるかもしれないとの恐怖心もなかったわけではありません。被爆が原因で亡くなる人が他にも周囲にあったからです。

また、これは放射能との因果関係が不明であるために、これまで余り話さなかったのですが、私自身、戦後の「健康状況」の上では比重が高いと思われまますのでお話ししますと、被爆後4年経った小学校4年生の夏に、原因不明の奇病に襲われました。体がだるくて何もできなくて寝たきりとなり、食べ物も受けつけられないという状態でした。田舎に住んでいた時ですが、村にあるただ1軒の医院で、老齢の医者が一人で外科、内科、耳鼻科も小児科も何でも診察するという医院でしたが、私の場合、当時は血液検査をするわけでもなく、病名も不明のまま特別な手当もなされず、私が被爆しているからそのせいだろうとされたようです。私は食事が摂れないため骨と皮に痩せて、薬を飲んでもその薬も戻してしまっ受けつけませんでした。夏休みを挟んで4か月間の長期欠席をしましたが、医者にも見放され、2日間は生死をさまようという体験をしながら、その後奇跡的に回復して、医者や家族を驚かせたそうです。何が原因だったのか、何が回復への力となったのか、今もって分らないままなのです。

被爆者が100人いたら、100通りの経験があります。私の場合は、幼児期の体験ですからそれほど詳しい内容ではありません。多くのことを知る人達のなかにも、自分の体験を話そうとする人はそれほど多くないのが事実です。思い出すのも辛いと、家族にさえも一切話さないまま亡くなった人が多いのです。69年経った今でも被爆者であることを隠し続けている人もあります。また、話す決心をして話してはいるものの一私も含めて一体験したすべてを話せる人ばかりではないのです。と言いますのは、放射能の及ぼす影響が未だすべて解明されていないこともあり、諸説取り沙汰されたりしていますので、公にしたい場合があるわけです。これから先の二世、三世にまで影響を及ぼすかもしれないという懸念を抱きながら過ごしている人が少なくないということです。

私の場合は、1.7キロという近距離にいたが、屋内にいたために火傷もしないで、建物の下敷きにもならず、“黒い雨”にも遭いながら雨宿りをしてそれを避けました—そのようにいくつもの幸運が重なって、今日まで奇跡的に生きることができました。ただしその後、精神的な影響を含めると、何の支障もなかったということではありません。

私は、28歳で第一子を出産しましたが、以前、被爆した女性に小頭症などの奇形児が生まれるという症例がニュースになり一国会議員の中に、被爆者には子どもを産ませないようにという暴言を吐いた人もあったそうですが一ともかく、私はそれを聞いていたために、長男を身ごもった時、心配のあまり悪阻が強くて、栄養摂取が殊に必要な時期にもかかわらず、出産の日まで思うように食事をとることができませんでした。出産の経験がある人は悪阻のことを理解できると思いますけれど、食事が摂れないという異常な状態が出産当日まで続いたのです。ですから、痩せこけた体で酸素吸入しながら出産するはめになりました。自力での出産が不可能となり、鉗子分娩に頼るといふ異常分娩を経験したわけです。幸運にも、そんな悪条件の中で生まれたにもかかわらず、五体満足な元気な子どもを授かることが出来ました。

他にも簡単には話せないような苦境を経験しましたが、私の場合は、あの日、一瞬にして虫けらのようにして殺された人達のことを思えば、そしてまた、長い間、後遺障害に苦しんで亡くなった人達も見ておきますので、自分の味わったそういったことは、微々たるものでしかない、と、一日一日、感謝しながら生きてきました。あの地獄の中から生かされたという気がします。また、私の場合は31歳で命を絶たれた母の分まで生きなければ・・・という気持ちと共に生きてきました。

【この項に関わる参加者との質疑応答】

●ご自身が4年生のときに病気になられたそうですが、他の家族は？

(仲伏さん): 祖父は1.7kmで被爆し、その地に残って数日間、救助活動に当たっていましたが、戦後3年たった時、脳梗塞で倒れ、6年半寝たきりで亡くなりました。当時は被爆者に対する支援などは皆無の時代でした。祖母は元来体が丈夫でなかったため、農業や家事に携わることなく、無理をしない自分流の生き方で89歳の天寿を全うしました。信仰心は篤く、熱心にお寺参りを続けて、原爆で亡くなった近親者や一般の原爆死没者の慰霊に努め、80歳まで慰霊式典の出席もほとんど欠かしませんでした。

●結婚した相手の方は、被爆されたことを知っておられましたか？

(仲伏さん): 小学校4年生の時に同級で、私が夏から秋にかけて4か月間休みましたから、当然知っているものと思って特には話しませんでした。また、人口の少ない田舎の村でしたから情報はすぐに伝わりますから、当然家族も知るわけですが、彼の叔母も被爆者でしたから被爆者に対して特別な意識はなかったようです。卒業して50年目のクラス会で私の長期欠席を覚えていたのは女性数名のみでした。

●お父さんやお兄さんとは、被爆した当時のことや、戦争のことは話されましたか？

(仲伏さん): 一切話しませんでした。父は頑なまで真面目な軍国少年として育ちましたから頭の切り替えが大変だったのではないのでしょうか。海軍では中国まで行った時の写真も残っていますが、一切、話しませんでした。今から思うと、諸々聞いておけば良かったと思います。父母の死後、兄とは帰郷の時に話題に上るようになり、学童疎開先でのことも数年前に聞いた話です。

●お母さまが亡くなられたことについても一切？

(仲伏さん): 新しい母を迎えましたから、自然に“ご法度”となり、話しませんでした。思い出すことは悲しい思いに浸ることの方が多いせいでしょうか、「それぞれの思い出を胸に秘めて…」という感じで、これまではあまり話しませんでした。次の帰郷は来年の被爆70年式典参加だと思いますから、ゆっくり話してみたいと思います。最後の機会になるかもしれませんから…。

3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

被爆者はこれまで半世紀以上、平和を願う人々と共に「ふたたび被爆者をつくるな」、「核兵器も戦争もない世界を」と、国の内外に訴え続けてきました。けれども平均年齢が78歳になった今、「生きている間に核兵器のない世界達成を！」の願いは叶えられそうもなくなってきました。次代を担う若い世代の皆さんにバトンを繋ぐ時期となりました。若い皆さん方に、平和はただじっとしているだけでは得られないものであること、努力なしには得られないものであることを、過去の歴史から学んでほしいと思います。そして、そこから教訓を学びとって再び争いに巻き込まれないよう、「平和を、人の命を最も優先する世界」を目指してほしいと思います。また、私は「平和は人と人の交流から生まれるもの」と信じます。時代を担う若者は、自分の得意とする様々な分野で世界の若者と交流を深め、お互いの文化を理解し合って欲しいと思います。「交流」を深めた時、「争い」は遠ざかるものと確信しています。

～核兵器廃絶への三つのメッセージ～

「第三次世界大戦が起きるか否かについては明言できないが、第四次世界大戦はあり得ないだろう」
(アインシュタイン博士)

「核廃絶は遅かれ早かれ、必ず達成される。問題はそれが核戦争の後か先かということだけだ」
(核戦争防止国際医師の会共同代表、ティルマン・ラフ氏)

「むかしむかし 地球とふ星あつたげな 核兵器もて滅びたそうな」
(NHK短歌大会受賞作品)

【この項に関わる参加者との質疑応答】

●被爆体験を話していこうと思われたきっかけは、どのようなことですか？

(仲伏さん):私が40代半ばに、大阪府高槻市の被爆者の会に所属していた時、中学校に要請されて迷っていた時、胎内被曝の中学校教師・松村千恵子さんに背中を押されて決心したのが最初のきっかけでした。当時荒れていた中学でしたが、200人が水を打ったように静かに、熱心に聞いてくれたことや、「被爆について初めて聞くことができ感動した」、「核兵器の恐怖を改めて感じた」、「私達も関心を持たなければいけないと思った」など、予想以上の手応えや感想の言葉に私の方が感動し、若い人たちへの喚起を促すために少しでも役立つのならと、一本の草の根になることを決意しました。

●記憶が残る年齢としてはぎりぎりのところだったと思いますが、69年間の中で突然甦った記憶はありますか？

(仲伏さん):私は被爆6年目に思いだして書く作業をしましたので、それである程度固定しました。以後40代半ばに、高槻市で松村さんと一緒に活動していた時に、被爆者の会で文集を出すことになったので、その時にもう一回、書き起こしました。それらがありますので、それを下地にして話しています。新たに思い出したことはなかったと思います。

●被爆して何年か経ってからまとめることで、記憶が定着したんでしょうか？

(仲伏さん):その通りだと思います。私は6年生の時に先生から夏休みの課題とされて、初めて当時のことを振り返って書き起こし作業をしました。それでまず定着しました。次に40代の時に高槻市の被爆者の

会で文集を出した時に、それをもう一回、思いだしながら書き起こした経験がありますが、その後新たに思い出したということはありませんでした。

●広島の小学生在が、広島に原爆を投下されたことを知らないそうです。

(仲伏さん):そうですってね。驚きました。私達が子育て時代に住んでいた大阪府高槻市では当時、8月15日が登校日となっていました。そこで戦争体験者から体験話を聞いていました。また、小学校の修学旅行も広島でした。今住んでいる府中市でも毎年、卒業を控えた生徒達に「被爆者のお話を聞く会」を開く学校と全く開かない学校とがあります。教育は大事だと思います。友人の故松村さんは、戦前・戦中の教育が間違っていたから、子供たちも皆「軍国少年」に憧れ、戦争に対して疑問も持たなかった。教育がいかに大事かということが分かったから、社会科の教師になって平和学習に取り組んだのだと話していました。

●私は72歳になりますが、空襲の記憶が残っています。

(仲伏さん):3歳の記憶って意外に残っていますね、断片的なものですけど。私も3歳の時に転居しましたが、前の家の間取りや、店舗に一部を貸していた時計屋さんのことも覚えています。被爆者の中でも、3歳の時のことを覚えていてそれを含めて証言されている方がいます。瞬間的な記憶は、皆さんもってらっしゃるそうですね、膝の上に抱かれていた2歳の被爆者がいらっしゃいますけど、原爆の落ちた瞬間に跳ね飛ばされてお祖母さんの膝から落ちたことを覚えていらっしゃるそうですから、寸時の記憶は相当遡って残るものなのですね。

●ニューヨークのセントラルパークで署名活動をしたとき、黒人の方や、ヒスパニック系の方は署名してくれるのですが、白人の男性は絶対署名してくれませんでした。原爆を落としたから、戦争が終わったのではないかと。でも世界中の人が集まっていたので、たとえば、ルーマニアの人などが、とても共感してくれたりもしました。

(仲伏さん):確かにそうですね。私達もニューヨークの街を平和行進して国連の広場まで行きましたが、その時、途中の公立公園の中にある喫茶店で、退役軍人がアルバイトをしていました。その人達は行進を冷ややかな目で見ていました。薄ら笑いさえ浮かべて。通行中のニューヨークの人も、概して冷たい目で見ていました。中にはあからさまに迷惑そうな顔をしている人もありました。頑張っているのは、外国から集まった人達ばかりで…。私はその時、もしも中国の人達が「南京大虐殺」の写真掲げて東京の街を大行進したとしたら、私たち日本人はどんな態度でいられるだろうか？と。そう考えると複雑な気持ちになりましたが…。つづまるところ、戦争がいけないのですが、謝罪を含めて、後始末をきちんとすることも大事だということでしょうか。

●ビデオで映像を残していらっしゃいますね？

(仲伏さん):それは、広島の平和祈念館(国立広島原爆死没者追悼平和祈念館)が企画作成したものです。祈念館の地下にあります。2011年に撮りました。来館者が希望する映像を見られるようになっているそうです。(インターネットでも見ることができます)

●被爆者の方のお話は貴重ですが、だんだんこのような機会が少なくなって、原爆の体験が風化していくのが怖いと思います。とくに、歴史的な話だけではなく、今もそういう現実があるのだという意識が薄れていくのが恐ろしいです。

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？

1. 可 2. 不可

【聞き取りをおこなった方の記入欄】

聞き取り日時	2014年 7月 31日(木) 18~20時	場所	日本生協連コーププラザ
聞き取りをされたのは	1. 個人 ②. グループ〔名称:JCCU協同組合塾「ヒロシマ・ナガサキを聴き、語り、受け継ごう」Bグループの8名〕		
聞き取り票記入者	清原 工・三崎 敬子	TEL/メール	
連絡先	〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 番地 主婦会館プラザエフ5階		
住所等	日本生協連資料室気付		

4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

Bグループでは、仲伏さんからお話を聞いた後、それに関しての質疑応答に時間を費やしてしまい(その内容は3までに盛り込み済み)、最後に参加者からひとことずつ発言していく時間がとれなかったため、この欄は書くことがありません。

以上